

-----  
[ 成果情報名 ] 極晩生の飼料用稲新品種「タチアオバ」を中心とした周年多収な作付体系  
[ 要約 ] 「タチアオバ」はホールクロープ向けの極晩生品種であり、乾物収量、可消化養分総量収量および耐倒伏性が優れている。また、栽植密度を低くした疎植でも多収であり、後作にイタリアンライグラス等を組み合わせた周年作付体系では約3 t /10aの乾物収量が得られる。

[ キーワード ] 飼料用稲、極晩生、周年作付体系、疎植、可消化養分総量

[ 担当部署 ] 畜産環境部 飼料チーム

[ 連絡先 ] 092-925-5177

[ 対象作物 ] 飼料作物

[ 専門項目 ] 品種選定、栽培

[ 成果分類 ] 技術改良  
-----

[ 背景・ねらい ]

国際飼料価格が高騰する中、畜産経営の安定のため水田有効活用による自給飼料増産が重要となり、飼料用稲が注目されている。このため、温暖多雨な本県の気候風土に適した飼料用稲新品種選定や栽培技術改善、周年作付体系等を明らかにする。

[ 成果の内容・特徴 ]

1. 「タチアオバ」は、出穂期が9月中旬、収穫適期が10月下旬となるホールクロープ向けの極晩生品種で、乾物収量および可消化養分総量収量（以下TDN収量）が多い。

また、従来の飼料用稲品種「ニシアオバ」と比較して倒伏には極めて強く、台風の上陸が多い九州北部の気象条件に適している（表1）。

2. 「タチアオバ」の後作にイタリアンライグラスまたはえん麦を組み合わせた周年作付体系により、約3 t /10aの乾物収量が得られる（図1）。

「タチアオバ」の施肥は牛ふん堆肥主体とし、6月中旬に移植、7月下旬からの中干し後から間断灌水し、落水を10月上旬に行う（図1）。

3. 「タチアオバ」は栽植密度を下げた疎植の場合でも慣行と同等の乾物収量およびTDN収量が得られる（表2）。

[ 成果の活用面・留意点 ]

1. 県内全域に適した極晩生の稲発酵粗飼料用稲として飼料作物奨励品種に採用（平成21年5月1日）。

2. 移植機に疎植機能がない場合は、一株苗数の設定を2～3本に調整することにより、疎植と同様の収量確保および必要苗箱数の約50%削減ができる。

[ 具体的データ ]

表1 「タチアオバ」の特性 (平成20~21年)

品種	出穂 月日	収穫 月日	稈長 cm	穂数 本/m <sup>2</sup>	乾物収量 kg/10a	茎葉重 kg/10a	TDN含量 %	TDN収量 kg/10a	耐倒伏性
タチアオバ	9/16	10/30	98	290	1,754 *	1,032 *	58.8 *	1,033 *	極強
ニシアオバ	9/ 5	10/11	93	310	1,474	830	61.3	903	中

- 注) 1. 移植日は6月19日。収穫期は黄熟期。  
 2. TDNは可消化養分総量の略。  
 3. TDN含量は推定式  $TDN = -5.45 + 0.89 \times (OCC + 0a) + 0.45 \times OCW$  により算出。  
 4. \*: t 検定により、5%水準で有意差あり。  
 5. 育成機関は九州農研(筑後拠点)。

6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	~	4月	5月	(kg/10a) 乾物収量 (TDN収量)	
				1,754	タチアオバ				822	382	2,958 (1,752)
										1,443	3,197 (1,798)

【基肥】 堆肥:2?3t/10a 硫安:10kgN/10a 湛水 間断灌水 中干 落水

【基肥】 堆肥:2?3t/10a 硫安:10kgN/10a

【追肥】 硫安:7kgN/10a (イリアの場合)

図1 「タチアオバ」を中心とした周年作付体系 (平成19年~21年)

- 注) 1. : 移植、 : 播種、 : 収穫。収量は場内試験および実証ほの平均値。  
 2. 中干期間は1週間。

表2 「タチアオバ」の栽植密度と収量 (平成18~19年)

栽植密度	苗箱数 箱/10a	稈長 cm	穂数 本/m <sup>2</sup>	乾物収量 kg/10a	穂重 kg/10a	茎葉重 kg/10a	TDN含量 %	TDN収量 kg/10a
18.2株/m <sup>2</sup> (慣行)	21.1	94.1	243	1,480	641	839	57.1	843
11.2株/m <sup>2</sup> (疎植)	11.5	92.6	233	1,493	640	854	57.6	860

注) 成績は移植日が平成18年6月14日、平成19年5月31日、平成19年6月21日の平均値。

[ その他 ]

研究課題名: 飼料用稲を中心とした栽培・収穫体系の確立

予算区分: 国庫受託(交付金プロ)

研究期間: 平成21年度(平成18~21年)

研究担当者: 柿原孝彦、手島信貴、中村由佳里、平川達也、棟加登きみ子、徳満 茂